

精神医学と哲学のあいだ

木村敏が考えたこと

芝 伸太郎, 野家啓一編著
深尾憲二郎, 谷 徹, 野間俊一,
檜垣立哉, 内海 健著

創元社, A5判 240頁, 3,080円, 2025年8月刊

(関西青少年サナトリウム) 清水健信

日本を代表する精神病理学者・木村敏を偲ぶ論集である。第1章から順に、自己(深尾憲二郎)、現象学(谷徹)、生命(野間俊一)、西田哲学(檜垣立哉)、時間(芝伸太郎)、あいだ(内海健)、臨床哲学(野家啓一)が論じられ、木村思想の全体像を概観できる構成となっている。ここでは紙幅の都合上、野間・檜垣・芝の三篇に焦点を絞りたい。

野間の「躍動する生命——生と死の意味を考える」は、「前自己」概念を独自に措定し、「前自己」の「あいだ」への開けという観点を導入することで、生や死をめぐる木村の臨床哲学を治療論へと展開しようとする意欲的な試みである。野間も述べているように、木村は治療について積極的には論じなかったため、その臨床哲学を治療的地平に開くことには大きな意義がある。とはいえ、「あいだ」に先立つ「前自己」を措定することは、「まず『あいだ』があり、然る後に自己と他者が生じる」という木村の根本主張に反することにもなりかねない。西田やハイデガーに依拠し、テクニク的な精神療法を忌避した木村に相応しい現象学的・人間学的治療論を構想するためには、メダルト・ボスや評者が注目してきたように、後期ハイデガーの「放下(Gelassenheit)」概念が一つの道標となるように思われる。

檜垣の「西田幾多郎と木村敏——生命とイントラ・フェストゥム」は、木村がそのイントラ・フェストゥム論において西田の「現在主義」を継承していることを的確に論じたものである(そしてこの木村の現在主義は、現象学的立場の谷からすれば受け容れ難いものでもあろう)。では逆に、木村が西田から引き継がなかったものは何か。それは端的に言って「絶対無」であろう。檜垣は西田の「絶対無」と木村の

「生命そのもの」を併置しているが、木村の「生命そのもの」は「生命一般の根拠(Grund)」ではあっても、「無底(Ungrund)」ではない。木村の臨床哲学は、西田哲学を現代思想として展開した最も成功した例の一つではあろうが、それが禅にも通ずる絶対否定の契機を置き去りにしがちでもあることの是非は、改めて問われねばなるまい。これは、木村の「あいだ」は楽観的過ぎるという内海の指摘とも無関係ではないだろうし、本書では深尾がこうした宗教(学)的問題に触れている。

芝の「私に先立ち私を規定する時間——ポスト・フェストゥムの消滅」は、精神分析の視点を導入しつつ、「取り返しがつかない」という木村の古典的ポスト・フェストゥム論を踏まえて、現代型うつ病を含めたうつ病の根本を「もう終わりという茫然自失」すなわち「原ポスト・フェストゥム」として剔出した論文である。所有に喪失が先行するという論点も興味深いが、評者にとって重要に思われたのは、野間のコントラ・フェストゥムはフェストゥム論そのものの無化だとする芝の解釈である。フェストゥムそれ自体の虚無化、すなわち「ニヒリズム」(西谷啓治)の問題は、現代型の病理の重要な特徴の一つだと思われるからだ。ニヒリズムの問題については、野家も部分的に言及している。

芝が序文で述べているように、現在の精神科臨床は人文知からますます遠ざかっている。しかしながら、臨床が「人と人との間」の出来事である限り、人文的な臨床知は決して失われてはならないものであろう。幸いなことに、本書の刊行にやや遅れて、資生会八事病院内に「木村敏記念臨床哲学文庫(「あいだ」の図書室)」も開館した。本書と合わせて木村敏再評価の機運が高まるとともに、「臨床とは何か」——これは臨床哲学の究極の問いであろう——が改めて真剣に問い直されることを願ってやまない。